

Title	「江戸藩邸内学校の研究(一)」
Sub Title	"A study of schools in feudal lords' estates in Edo (1)"
Author	田中, 克佳(Tanaka, Katsuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.40 (1994.) ,p.35- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000040-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「江戸藩邸内学校の研究(一)」

“A Study of Schools in Feudal Lords' Estates in Edo (1)”

田 中 克 佳*

Katsuyoshi Tanaka

There were really many means of education in Edo of the period of Edo. This study is an investigation on the schools in feudal lords' estates in Edo which are one of such means.

(1) It goes without saying that there were not such schools in all lords' estates. How many lords' estates had such schools?

(2) What images can we have of educational situation of these schools?

(to be continued)

(3) And in connection with this investigation, how was the education of clansmen and their children in Edo cared in the case of no such schools? Moreover what relation had the common people to such schools?

(to be continued)

Materials for this study are principally “NIHON KYOHKUSHI SIRYOH (Materials for Japanese Educational History)” edited by the Ministry of Education in the period of Meiji.

はじめに

江戸時代の都市江戸には、実に様々の教育機関が成立している。本稿は、それらの中で、江戸幕府の重要政策の一つであった参勤交代制の落し子ともいうべき江戸藩邸内学校について調査を試みるものである注1。

参勤交代制とは、諸大名の定期交代の江戸参勤と封地在国を制度化した江戸時代の大名統制策の一つ注2であるが、したがって、都市江戸の藩邸には、藩主とその子女のことはいうまでもなく、常時各藩の藩士の一部が住んでいたし、また江戸で生まれ育つ藩士の子弟もいたわけであり、これらの人びとへの教育は、とうぜん配慮の対象であった。

ところでまた、江戸に常住して就封しない「定府」ということがあった。幕府の要職にある大名、旗本・ご家人、江戸藩邸詰めの大名の家臣などが江戸に定住した。また、定府の藩というものもあった注3。この種の藩の場合、本拠はいわば江戸にあったから、江戸藩邸内学校こ

そいわゆる藩校に相当することになる。

江戸藩邸内に設けられた学校の一例として、中津藩士福沢諭吉の蘭学塾（藩命により江戸築地の中津藩中屋敷で開塾【福翁自伝】）が想起される。

もちろん、すべての藩の江戸藩邸に学校の設けがあったわけではない。どの程度の藩に、この種の設けがあったのか。この種の学校の教育事情についてどの程度のイメージをもつことができるのか。また、関連して、この種の学校を設けなかった藩の場合、江戸在住の子弟・藩士の教育はどのように配慮されたか。この種の学校と江戸庶民との関係はどのように把握されるか。やや具体的には、これらのことをとくに江戸期について探るのが本稿の目的である。

第1章 資料について—『日本教育史資料』『江戸藩邸内学校等二係ル諸件』

本研究は、『日本教育史資料』（以下『史資料』と略す）を中心に研究を進める。『日本教育史資料』とは、周知のように、文部省が「明治十六年報告局ニ命スルニ本邦教育史編纂ノ事ヲ以テ先ツ資料ノ蒐集ニ着手センメ同年

* 慶應義塾大学文学部教授（教育史）

二月各府県ニ達シ府県庁及ヒ学校等所蔵ノ旧記其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リテ学制頒布前ニ係ル学事ノ諸項ヲ調査セシメ又諸官衙及ヒ旧藩主等ニ照会シ其貯蔵ノ旧記ヲ借覽スルヲ約シ苟モ古来我カ邦ノ教育ニ係ル書ハ細大挾ハス之ヲ蒐集シ以テ此編纂ノ資料ニ供セン」(「緒言」p. 1) として蒐集を企てた、日本教育史、とくに近世日本の教育政策、教育機関、教育内容、教育方法、就学状況、教育思想などの変遷・発達を知る上で欠くことのできない根本資料集である。資料九冊、附図二帙からなり、初版は文部省報告局編纂・富山房発行で、明治23年から25年にかけて出版された(36年から37年にかけて再版)(昭和47年再刷臨川書店版、木山幸彦「解説」による)。

この『史資料』所収の内容は次の通りである。

「第一冊から第三冊の前半(巻一—巻八)までは、府県庁の報告にもとづく各藩学校の史料、第三冊の後半(巻九)は、全国的な郷校史料である。第四冊(巻一〇—巻一一)は旧藩主の報告による諸藩の教育史料が参照として収録され、それに藩儒の小伝が入っている。第五冊(巻一二—巻一五)は主として諸家の教育意見、改革論。第六冊(巻一六—巻一八)は図解をつけた祭儀の史料で、第七冊(巻一九—巻二一)は昌平校、和学所、医学所、開成所など幕府教育機関、天領の諸学校が集められている。第八冊は前半(巻二二)に維新後のもをもふくむ教育論。第八冊後半と第九冊(巻二三—巻二五)は、私塾、寺子屋のリストと、各地の有名な私塾の塾則及び、学者、武芸者の小伝が収録されている。」(同前)

『史資料』所収内容の要は以上の通りであるが、さらに立ち入って文部省の調査事項の詳細を知るために、「取調要目」「取調要項」に回答するに当たって参照すべく文部省が例示した事柄がどのようなものであったかを示しておこう。

「 参照

第老号

府県

今般当省ニ於テ教育沿革史編纂候ニ付府県庁及学校所蔵ノ旧記類其他前儒ノ私記古老ノ口碑ニ資リテ学制頒布前ニ係ル左記ノ諸項取調本年八月限可差出此旨相違候事

文部卿福岡孝弟代理

明治十六年二月五日

大藏卿松方正義

旧何藩学制沿革取調要目

藩内学事上ノ諸制度

藩主ノ布令論達及学業上達ノ者ニハ加役米又ハ引米

等ノ名義ヲ以テ徴課セシ間接ノ禄税ヲ免除スルカ如キ奨励法等其他蓋藩学事ノ状況ヲ觀察スルニ足ルノ事項アラハ之ヲ併記スヘシ

士族卒ノ子弟教育方法

藩立学校へ必ス入学セシメシヤ各自ノ意向ニ任セ家塾等ニテ修学スルヲ許セシヤ藩費ヲ以テ他国へ遊学セシメ若クハ私費遊学ヲ許可シタルヲアリシヤ或ハ全ク学事ニ干与セシヲナキノ類ヲ詳記シ且其藩士ヲシテ生徒ト共ニ講義ヲ聴聞セシムルノ制アラハ亦併記スヘシ

平民ノ子弟教育方法

家塾寺子屋ニテ修学セシノミナルヤ藩立学校へ入学スルヲ許セシヤ或ハ農民等ハ学事ニ従事スルヲ禁止セシヤノ類ヲ詳記スヘシ

家塾寺子屋設置ノ制度

家塾寺子屋ヲ開設スルモノハ奉行郡宰里正等ノ許可ヲ受ケシヤ或ハ他ノ檢束ヲ受クルナク何人タリトモ自由ニ開設スルヲ得シヤノ類ヲ詳記スヘシ

右ノ外蓋藩学事上ノ事項ニシテ編纂ノ資料及ヒ参考ニ供スヘキモノハ之ヲ蒐集スヘシ但ニ幕領内ニ係ルモノハ本項ニ依テシテ調査スヘシ

○

旧何藩立学校取調要項(江戸藩邸内ノ学校等ニ係ル諸件ハ本項ニ準シテ取調フヘシ)

学校名称

設立以来名称ニ変更アラハ之ヲ記載スヘシ

校舍所在ノ地名

移転等ノコアラハ其旧趾ニ係ル事項ヲモ記載スヘシ沿革要略

学校創立ノ年代及ヒ事蹟学事隆興ノ原因及ヒ事實(例ヘハ旧藩主某時代ニ於テ儒学ヲ尊崇セシヲ以テ学事拡張セシノ類) 学校設立ニ尽力セシ人物ノ氏名行事又ハ該校ニ関係アル著名ナル学士ノ氏名小伝(事業学派著書等)ヲ詳記スヘシ

教則

教科用書及ヒ授業ノ方法順序時間等ヲ詳記[記?]スヘシ

学科学規試験法及ヒ諸則

和学、漢学、洋学、医学(漢洋) 算法、筆道、習札及ヒ兵学、弓、馬、槍、劍、砲術、柔術、游泳等其学校ニテ教授セシ科目ヲ列記シ又生徒ニハ必ス文武兩道ヲ兼修セシメシヤ文学ト武術ト程度ノ比例ハ如何ナリシヤ(例ヘハ四書ノ大義ニ通スルモノハ武術ノ免許以上ニ当ルノ類) 或ハ其一科ヲ専修スルヲ

許可セシヤ且生徒学習ノ期限（例ヘハ年令何歳ニ至リテ入学シ何々ノ課程ヲ了ヘテ退学スルノ類）春秋試験ノ法生徒賞品授与ノ法其他生徒訓条罰則等学校ノ組織及ヒ状況ヲ観察スルニ足ルノ事項ヲ詳記スヘシ但入学許可ヲ得シ者ハ礼服着用師範家ヘ回礼スルノ類ニ係ル儀式制規ヲモ記載スヘシ

職名及ヒ俸禄

学校奉行学監教頭教授等ノ職名定員及ヒ役料扶持米額（維新前ト学制頒布前トノ兩様ノ計査ヲ要ス）且座席身分取扱等ノ件ヲモ記載スヘシ

職員概数

教員事務員門衛等学校ニ奉務セシ人員（前ニ同シ）ノ概数ヲ記載スヘシ

生徒概数

寄宿通学生徒（前ニ同シ）ノ概数及ヒ寄宿生徒ノ定員藩費自費ノ区別ヲ記載スヘシ

束脩謝儀ノ有無

学校經費

一周年ノ學費ヲ米何千石金何千兩ト定メ或ハ学田何町（前ニ同シ）ヲ付シテ學費ニ充テ又ハ學費ヲ藩土ニ賦課スルノ類總テ其金穀ノ概額ヲ掲ケ且學事ノ張弛ニヨリテ學費ノ増減等アリシモノハ其事實ヲモ記載スヘシ

藩主臨校

藩主等臨校シテ講義聽聞生徒ノ試業ヲ為セシコアラハ其事實概状ヲ記載スヘシ

祭儀

聖廟ノ設置アリテ積糞積菜ヲ執行セシコアラハ其礼典ノ概状ヲ記載スヘシ

学校構造及ヒ建物図面

地坪建坪ノ概数ヲ記載スヘシ

学校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及ヒ蔵書ノ種類部数

右ノ外学校ニ関スル旧記学校ノ紀事序文ノ類ニシテ編史ノ資料又ハ参考ニ供スヘキモノハ詳悉蒐録スヘシ但旧幕府領内等ノ学校モ本項ニ依違シテ調査スヘシ

○

旧何藩領地内家塾（寺子屋）取調要項

名称

所在地

塾主氏名

学科（寺子屋ハ兼テ教ヘシ科）

教師ノ数

生徒ノ概数

授業ノ順序

教科書用（寺子屋ハ習字及ヒ読書用書）

学習年限

束脩謝儀

塾主ノ行事及ヒ著書蔵書ノ種類部数（寺子屋ハ著書以下ヲ欠ク）

塾主ノ身分

沿革略及ヒ雜事

極メテ盛ナリシ年代（寺子屋ハ之ヲ欠ク）

調査セシ事實計数ニ関スル年代

以上家塾寺子屋ノ諸項ハ当省報告局ヨリ配付スル甲乙号取調表ニ記載スヘシ但旧幕府領地内等ノ家塾寺子屋ハ本項ニ依違シテ調査スヘシ」（同前『史資料一』 pp. 7-13。以下「①7-13」の様ニ略記する。）

どのような事柄を、どの程度に詳しく取り調べようとしたものであるか、おおよその理解は得ることができる。上記のような方針・準備の下に行われた調査・蒐集ではあったが、この種の事業に当然避けられない蒐集資料の網羅性・正確性の問題について、資料集刊行当時、すでに問題点が指摘されていた。

『史資料』の「緒言」に、次のように述べられている。「抑々廢藩置縣ノ際書類散逸或ハ烏有ニ歸セシモノ殊ニ多ク而シテヨリ又十余年ヲ經過セリ既往ノ事實ヲ網羅シテ精確ノ調査ヲ為スコトノ困難ナルハ固ヨリ論ヲ待タサルナリ然ルニ爾來兩三年ニシテ進達スル所ノ調査書二百余部ニ至レリ調査ノ方法ハ精粗一ナラス間々教養ノ方法學事ノ沿革等其ノ要領ヲ尽サ、ルモノアリト雖モ什ノ八九ハ進達ヲ了シ僅ニ其ノ一二ヲ余スノミ是レ各府県ノ尽力諸旧藩主其他ノ好意ニ由ルモノニシテ亦当該官吏カ往復照會尋問質疑其機ヲ誤マラスシテ蒐集ニ從事セルノ結果タラスンハアラス但如何セン残余ノ一二分今ニ至テ達ヲ了セス往昔數年資料蒐集ノ業功ヲ一簣ニ虧ク豈ニ遺憾ナラスヤ夫レ然リ資料ノ進達ヲ欠クモノアリ調査ノ精密ヲ欠クモノアリ」（①1-2）

また同じく『史資料』所載の「日本教育史資料調査報告」は、次のように述べている。

「往時大小二百八十餘藩ノ諸家晩クモ維新ノ際ニ至リテハ概シテ學校ヲ設ケ子弟ノ教養ヲ施セリ然ルニ其學事ノ調査未済ノモノ今仍ホ四十藩アリ加之既済ノモノト雖モ之ヲ文部省定ムル所ノ調査要目ニ対照スレハ未タ其要領ヲ悉サ、ルモノ少カラシテ到底完全ナル史料ノ体裁ニ編成シ難キ所アレハナリ」（①3）

この事実と、この時蒐集された資料のうち報告に採用

されなかったものがあったことの発見の事実をふまえて、より完全な日本教育史資料集を目指す研究が、近年試みられている（日本教育史資料研究会編『日本教育史資料』の研究、1986、玉川大学出版部/同『日本教育史資料』の研究2 藩校編、1993、同前）。

本研究は、『史資料』にこのような問題点があるにもかかわらず、しばしば指摘されるように、この資料集が近世日本の教育史研究上欠くことのできない第一級の資料集であることにかんがみて、ともかくこの『史資料』を利用することによって、上記の引用中に「江戸藩邸内ノ学校等ニ係ル諸件ハ本項ニ準シテ取調フヘシ」とあるこの「江戸藩邸内ノ学校等ニ係ル諸件」について調査・研究を試みるものである。

第2章 江戸藩邸内学校一覧

「日本教育史資料調査委員藤井善言」の「日本教育史資料調査報告」（明治22）(①3)は、「往時大小二百八十餘藩ノ諸家（略）概子学校ヲ設ケ子弟ノ教養ヲ施セリ然ルニ其学事ノ調査未済ノモノ今仍ホ四十藩アリ」としている。

江戸時代の藩の数は、改易、移封、分領、あるいは注2のような参勤交代の緩和による文久・明治の帰封などのために、固定的に捕えることは困難であるが、『史資料』の目次によって数えられる藩の数は244である注4。

この数字の中には明治になって諸事情で成立した藩も含まれるから、江戸時代に時限を限った場合の藩の数とするには正確な数字ではないし、その江戸時代においても上述の事情などによる増減があるからこの種の数字に正確さを求めることは困難である。上記の数字を一応の目安と心得て、以下、江戸期（慶応期までを江戸期とするが、9月8日に明治改元となる慶応4年は明治期として扱う）の江戸藩邸内学校の調査を試みる。（なお、『史資料』以外の資料・文献による江戸藩邸内学校についても、先行研究など管見の及ぶ限りは組み込むことはいうまでもない。）

『史資料』に江戸藩邸内学校の設けが有ったことが明確に（若干曖昧な富山藩および岡山藩を含む注5）示されていると判断される藩名を示すと次のようである。

【江戸藩邸内学校一覧】

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名（創立年）	江戸邸校所在地	備考
1	1	淀 [?]	不明（安政5年）	⑤神田小川町（安永～明治）	①1

①江戸藩邸内学校の設けの有る藩名注6

淀、郡山、尼崎、桑名、神戸、鳥羽、名古屋、犬山（慶応4年成立 [下記一覧備考参照]）、岡崎、福島、浜松、掛川、沼津、田中、佐貫、鶴牧、一宮、佐倉、多古、高岡、笠間、麻生、彦根、山上、野村（江戸期は大垣新田 [畑村] 藩。明治2年野村藩と改称）、郡上（宝暦8年成立の美濃国八幡藩。廃藩置県で郡上藩となる）、高富、松代、龍岡（宝永8 [=正徳元] 年奥殿藩成立。文久3年陣屋を田野口に移し、田野口藩成立。慶応4年藩名を龍岡に変える）、小諸、須坂、前橋、高崎、館林、沼田、安中、伊勢崎、壬生、二本松、守山（明治3年松川藩と改称）、仙台、弘前、館（江戸期は松前藩。明治2年成立）、秋田、岩崎（江戸期は秋田新田藩。明治3年成立）、小浜、丸岡、鯖江、富山、新発田、与板、篠山、鶴舞（江戸期は田辺藩。明治2年改称）、出石、豊岡、鳥取、松江、姫路、福本（寛文3年立藩、同5年廃藩。交代寄合。慶応4年再度立藩）、三草、小野、岡山、高梁（江戸期は松山藩。明治2年改称）、岡田、福山、広島、山口（文久3年従来の萩藩から改称）、和歌山、徳島、高松、丸亀、松山、宇和島、大洲、福岡、久留米、豊津（江戸期は小倉藩。明治3年改称）、中津、岡、佐賀、熊本、延岡、長尾（江戸期は田中藩。明治元年成立）、鶴舞（江戸期は浜松藩。明治3年成立）、松尾（江戸期は掛川藩。明治元年成立の柴山藩を経て明治3年に成立）、朝日山（江戸期は山形藩。明治3年成立）、菊間（江戸期は沼津藩。慶応4年成立）、高瀬注7（江戸期は熊本新田藩。慶応4年成立）

上記の（ ）内の記述を勘考すると、重複もしくは江戸期に実体のないものとして、次の諸藩が除かれる（但し必要な場合には、『史資料』中のこれら諸藩の記述も利用する）。

福本、長尾、鶴舞、松尾、菊間（88藩中5藩）

②「江戸藩邸内学校一覧」

以下に「江戸藩邸内学校一覧」を表示する。

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
2	1	郡山 [参勤]	文武教場(元禄年中)	神田橋内→幸橋内へ(松平吉里[享保9~延享2]時代に)	①16
3	1	尼崎 [?]	止然舎(文化12年10月)	⑤鉄砲洲(文化期)	④2/4
4	2	桑名 [定府]	校名不明(設立年不明[松平(久松)家時代])	⑤北八丁堀(文政期)	①96
5	2	神戸 [参勤]	進徳堂(文化13年8月*) / 成章館(享保年中一藩主一族のため)*	不明	①110/111 *出典:『神戸平原地方郷土史』後編(藩史大)
6	2	鳥羽 [参勤]	造士館(設立年不明)	不明	④53
7	2	名古屋 [参勤]	弘道館(設立年不明)	不明	①139
8	2	犬山 [参勤]	学問所(天保年間創立)→要道館*	④(所在不明)*	①140/* 愛知県取調「尾参両国旧各藩」の「教育沿革史資料補遺」 ④56 ☆この藩は慶応4年正月成立。但し前史は長い。支配権はほぼ名古屋藩が掌握していた。(藩史大)
9	2	岡崎 [?]	名称ナシ(本多忠武[?]ヨリ忠直[明2~]代)	④日比谷大名小路⑤本郷森川町	④73
10	2	福島 [参勤]	校名不明(文化年間)	不明	①160 ☆福島藩(延宝7成立。幕領を繰り返す)→重原へ転封(寛政4=明治元12月国替で=重原藩成立。福島藩は明治2消滅)
11	2	浜松 [参勤]	校名不明(不明)* / 「克明館ト称ス但設置以来名称ニ変換ナシ(江戸藩邸学校全上)」**	不明**/**	☆慶応4年成立の府中藩に吸収(=浜松藩消滅)→ID84 鶴舞藩参照。 *①178/**①230(鶴舞藩報告)

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
12	2	掛川 [?]	①拭目館②曙戒堂(不明)*	西ノ窪邸学(稽古所)/龍口二邸学/常盤橋邸学(拭目館)/駒込邸故学**	*①179/**④83/7 ☆延享3年太田資俊以下7代123年就封。明治元年上総国柴山に転封。明治4年松尾村に藩庁を移す。→ID85 松尾藩参照。
13	2	沼津 [?]	明親館分校(文久年中)	④浜町	①205 ☆慶応4年菊間に移封。沼津藩は廃藩。→ID87 菊間藩参照。
14	2	田中 [?]	日知館(万延元年)*	④神田橋之外*	*①207/④76 ☆享保15年以後安定,存続。慶応4年=明治元年成立の府中藩に吸収。田中藩は上総長尾に転封(=長尾藩成立)後,消滅。→ID83 長尾藩参照。
15	2	佐賀 [参勤]	撰秀館(寛政8年)	④外桜田	①243-244
16	2	鶴牧 [?]	校名不明(不明) [修来館(天保年間。一説に末年。藩主の学校)→具服橋内]*	④具服橋内⑤浜町土井堀	①245-8 *『千葉県教育史』(藩史大) ☆この藩は,文政10年に成立。
17	2	一宮 [定府]	学問所(不明)	「学問所ハ(略)便宜開設セシヲ以テ一定ノ場所ナシ」 ①248	①248 ☆この藩は文政9年に成立。 参:[要覧]④西御丸下(安永)木挽町築地(文久)⑤本所埋堀(安永)渋谷(安永,文久)麻布坂下町(文久)
18	2	佐倉 [参勤]	江戸成徳書院(天保4)* (天保8年1月**)渋谷御屋鋪,八丁堀読書所***	不明 参:[要覧/武鑑]⑤渋谷(安永,文化,文久)	*①254他/④90 **『佐倉藩学史』,『佐倉市史』[卷二](藩史大) ***④90
19	2	多古 [参勤]	学問所(天保元年)	小石川 参:[要覧]④小石川西富坂上⑤小石川(安永,文久,明治)	①341
20	2	高岡 [参勤]	学習館(文久2年)	④小川町雉子橋通	①342 ☆庶民の入学も許可。
21	2	笠間 [参勤]	忠誠館(寛政)	④日比谷御門内⑤浜町	①362/366

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
22	2	麻生 [参勤]	校名ナシ(弘化以後)	不明 参: [要覧/文化武鑑] ①浜町 ②深川小名木川(以上、文化、文久、明治)	①367-68
23	3	彦根 [?]	武芸小屋(嘉永4以前)/学問所(嘉永4)*	**①榎田御門之外 ②赤坂喰違	*①402/3 **①403/『文化武鑑』『藩名便覧』(藩史大)
24	3	山上 [定府]	学問場(文久年間)/武芸場* 文武講究所(文化年間以前)**	不明	*①462 **(藩史大)
25	3	野村 [?]	済美館(文久3)	①外桜田	①469-470 ☆この藩は江戸期は大垣新田藩(畑村藩) [戸田氏成=定府大名、元禄元年立藩。寛政10年氏存、畑村に住む]。明治2年野村藩と改称。(藩史大)
26	3	郡上(八幡) [?]	講堂(天明度)	①青山足輕町 ②小石川水道橋外	①474 ☆八幡藩の別称。宝暦八年青山氏から七代目で大政奉還。廃藩置県により郡上郡となる。明治4年岐阜県に編入された。(藩史大)
27	3	高富 [定府]*	教諭学校(弘化年間)**	西丸下(弘化) → ①麻布市兵衛町(嘉永末) [→美濃国高富村(明治初年)]**	*「旧藩ハ在府ノ一小藩」とある。 ①488 **①489/(藩史大)
28	3	松代 [?]	文武舎(嘉永4)[嘉永5年2月*]	溜池(天保11年以前) → (天保12~15年) → 外桜田新橋(弘化元年~)	①504 *(藩史大)
29	3	龍岡 [定府]	修業館(安政元年)	麻布 [→龍岡(明治元年)]	①550 ☆大給藩 → 奥殿藩 → 文久3年田野口藩(佐久郡田野口村) → 慶応4年龍岡藩
30	3	小諸 [参勤]	校名不明(不明)	不明 参: [藩史大] 牧野家 ①水道橋外 ②本所	①558 ☆藩主の出入り複雑。元禄・牧野氏以後ずっと牧野。
31	3	須坂 [参勤]	五教館(不明)	不明	①565

ID	卷	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
32	3	前橋 [?]	博諭堂(不明) 博諭堂(慶応3年11月)*	江戸邸二ヶ所[上屋敷及高輪陣屋] 参:[要覧/大武搖]㊦赤坂溜池端(明治まで)	①571/578 *(藩史大) ☆前橋城移転前は武州入間郡川越 ①571
33	3	高崎 [参勤]	校名不明(不明)	不明	①580
34	3	館林 [参勤]	求道館・演武場(安政4) 就外舎(分館,安政4)	㊦呉服橋之内(求道館)㊧ 浜町(就外舎)	①614
35	3	沼田 [参勤]	敬修堂(天保年間) 敬脩堂(文久元)・学問所 (弘化元)*	㊦江戸見坂(芝区葺手町25番地)	①618-619 *④141-3
36	3	安中 [参勤]	造士館(不明)	不明	①620
37	3	伊勢崎 [参勤]	校名不明(不明)	不明	①625
38	3	壬生 [参勤]	自成堂(忠學* = 文政9~安政4)**)	江戸三番町 参:[文政武鑑]㊦三番町**	*①636/④144 ** (藩史大)
39	3	二本松 [参勤]	文学校(宝暦年中~慶応年 間迄) 武学校(不明)	文学校=㊦霞ヶ関(時宜[教師宅]ニヨリ㊦永田町)/武学校=射的場(㊦永田町)・角打場(㊦長者丸)・その他(特=校舎ナン)	①693
40	3	守山 [定府]	養老館(武場の設なし) (宝暦年間)	藩主江戸邸内(「字厩前ト唱フ」*) 参:[要覧]㊦小石川大塚吹上(明治まで)	*①694 ☆水戸藩の支藩として元禄13年に成立。明治3年松川藩と改称。
41	3	仙台 [参勤]	順造館(文化7)	芝藩邸*	①699 *④167

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
42	3	弘前 [参勤]	校名不明(寛政8)→文化年中廃止。素読教授任命→学問所再興(安政年中)弘道館(寛政9年11月成立)→再開(文政元年8月)*	再興学問所=生南長屋(本所ニツ目)弘道館=江戸藩邸上屋敷/再開=大川端中屋敷*	①723 *『弘前市史』(藩史大)
43	3	館 [?]	明倫館(天保11年)	生浅草新寺町([要覧]下谷新寺町)(正徳5年9月~明治)	④170 ☆館藩→明治2年6月松前氏の版籍奉還で成立(藩史大)。江戸期は松前藩。
44	3	秋田 [参勤]	日知館(不明)	下谷三味線堀 参:[要覧] 生内神田旭町(天和二年類焼,翌年下谷へ)下谷七軒町	①863-4
45	3	岩崎 [定府]	勅典館(不明) 学館=勅典館(義純の代) [文政~嘉永年間]に創始*	浅草→移転(分館アリ) 参:[藩史大] 生浅草鳥越(はま丁(『文化武鑑』))	①865/☆元禄14年秋田新田藩成立。定府。明治元年秋田に移り、3年岩崎藩成立。江戸期は秋田新田藩。 *『秋田県岩崎町郷土史』(藩史大)
46	4	小浜 [?]	信尚館(文政元年*ノチ講正館=合併)/必観楼/講正館(安永2年頃*)	①昌平橋(信尚館) ②浜町(必観楼) ③牛込(講正館)	②3 *『旧小浜藩学制沿革取調要目』, 赤見貞著『蜘蛛の網』(藩史大)
47	4	丸岡 [参勤]	校名不明(寛政6)	生幸橋門外	②65-6
48	4	鯖江 [参勤]	稽古所(文化10)→措陰堂(天保12改称)	生三田小山(稽古所)一丸ノ内辰ノ口(措陰堂)	②75/④180 ☆享保5年成立の藩。 参:稽古所(略)→措陰堂(略)龍ノ口/麻布教授所(天保4年)麻布古川町→慶応3年廃止(『鯖江藩学制』『鯖江市史』別巻)
49	4	富山 [参勤]	校名不明(不明)	不明	★有無やや曖昧だが、「江戸藩邸内ニ於テ往昔ヨリ下士以上ノ者(略)又ハ子弟ノ者ニテ文武ノ両道ヲ兼修セシム」②259により有として処理。
50	4	新発田 [参勤]	校名不明(第十世直諒[享和2~天保9]*)	不明	②273 (②279/②294) *参:[要覧]
51	4	与板 [参勤]	学問所(不明)	不明	②310

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
52	5	篠山 【参勤】	校名不明(不明)	不明	②322
53	5	舞鶴(田辺) 【参勤】	済美堂(以成ノ時 [=文化元~文政8(藩史大)] 仮校ヲ設ケ)	不明	②322 ☆元和8年田辺藩成立。明治2年紀伊国の田辺藩との混同を避けるために改称。江戸期は田辺藩だがこの藩名での報告なし(紀州田辺はある)。
54	5	出石 【参勤】	校名不明	不明	②395/④243
55	5	豊岡 【参勤】	武学校→稽古場(天保6~文久2)* 学校→稽古堂(天保5)**	⑤麴町2丁目(文武両校)*	*②405 **②412-3
56	5	鳥取 【参勤】	学問所(天保14)	*⑤八代洲海岸	②459
57	5	松江 【参勤】	校名不明(宝暦8)* 西洋学校(洋学所,のち統合される)(文化2年)**	不明* 不明(江戸藩邸内→翌年松江へ移る)**	*②466 **『雲藩職制』,『松江市誌』,『松江北高等学校百年史』,内藤正中『島根県の教育史』(藩史大)
58	6	姫路 【?】	校名不明(不明)	江戸龍ノ口邸内	②513
59	6	福本 【?】	校名不明(不明→文久2,廃絶)	不明	②546 ☆寛文3年立藩。同5年嗣子なく弟政武が遺領の一部を継ぐも廃藩。政武,交代寄合となる。以後数代を経て慶応4年6月再度立藩。(藩史大)
60	6	三草 【定府】	顕道館(天正年間)→三草へ(維新後) 仮学校(文政年間)→慶応4年藩主帰国に伴って三草陣屋(顕道館)*	不明 外桜田(仮学校)* 参:【要覧】文政武鑑 ⑤外桜田	②555 *(藩史大) ★江戸期は仮学校,顕道館は明治か。
61	6	小野 【参勤】	校名ナン(不明)	不明	②561

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
62	6	岡山 [参勤]	校名不明(不明)	不明	有無曖昧だが、次により有として処理→「江戸藩邸亦儒員ヲ置キ藩学ト同シク(略)経書ヲ小書院ニ講センメ諸職員及在邸ノ諸士ランテ之ニ聴カシム」②599
63	6	高梁(松山) [参勤]	学問所 or 有終館(勝静[嘉永3~*]以前?/安政2)	外桜田邸内(嘉永3以前?/安政2~/その後不定)	②613 *[要覧] ☆江戸期は松山藩(備中)。明治2年高梁藩と改称。
64	6	岡田 [参勤]	校名不明(学校及び演武場)(不明)	上小石川猿楽町	②623
65	6	福山 [参勤]	校名ナシ(江戸丸山邸学問所[文政初年]→江戸誠之館(同邸内文武場)[嘉永7])	丸山邸=本郷 参:[要覧] ⊕本郷丸山町(安永~明治)	②628-629/②635/④262
66	6	広島 [参勤]	講学所(不明)	上屋敷 参:[要覧] 上桜田霞ヶ関(安永~明治)	②655
67	6	山口(萩) [?]	有備館(天保)	不明	②656/②741 ☆文久3年に敬親が萩城を出て山口に移り藩政を行ったため従来の萩藩の名は消え、山口藩と称するようになった。
68	7	和歌山(御三家) [参勤]	明教館(寛政4)→文武場(慶応年間) [明教館(寛政4年)国学所(嘉永7年11月)蘭学所(同12月)江戸武芸場(安政2年江戸赤坂)]*	赤坂藩邸内山屋敷 参:[要覧/文化武鑑] ⊕赤坂喰違外(南八丁堀)(安永、文化、文久)	②832 *『南紀徳川史』第十七冊(藩史大)
69	7	徳島 [参勤]	長久館(安政3~元治元=尾藩地ニヨリ庵)	八丁堀邸 参:[要覧] ⊕南八丁堀(安永~明治)	②860
70	7	高松 [参勤]	学文所(頼恭就封ノ初=頼恭[元文5~]*)	不明	②873 *[要覧]
71	7	丸亀 [参勤]	集議館(不明) *集義館(文化10年)	愛宕下新シ橋外藩邸内 参:[要覧] 上桜田新シ橋之外(安永~明治)	②879 *『丸亀市史』(藩史大)

ID	卷	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
72	7	松山 [参勤]	校名不明(不明)	不明	②887
73	7	宇和島 [参勤]	校名不明(不明)	不明	②892
74	7	大洲 [参勤]	習智堂(文化年間)	下谷藩邸内	②892
75	8	福岡 [参勤]	江戸学問所(復学舎・武樹 [天明4])→元治元廃[在邸 ノ士卒本藩帰還ニヨリ]	不明[江戸霞ヶ関藩邸] 参:[要覧] ㊦桜田霞ヶ関 (安永~明治)	③9/21-2 ☆参:江戸学問所(天明4年)江戸 霞ヶ関藩邸一生徒数150~160 名。敷地不詳。建物凡41坪。元 治元年廃止。(藩史大)
76	8	久留米 [参勤]	校名不明(不明)	不明	③46
77	8	豊津(小倉) [?]	思永館出張所(寛政3)	㊦神田橋内	③73/(71) ☆明治2年小倉から豊津と改称。 同3年豊津藩成立。江戸期は小倉 藩。
78	8	中津 [参勤]	校名ナン(天保年間一(在邸 内に設置*))	木挽町七丁目/二本榎 参:[要覧] ㊦木挽町潮留 橋(安永~明治) ㊦鉄砲洲 (同) ㊦芝二本榎(同)高輪 (文久)	③77(③79に「江戸御稽古場」と ある。) *『中津歴史』下、『扇城遺聞』 (藩史大) ☆享保2年奥平昌成の中津入封以 来定着。
79	8	岡 [参勤]	学問所・武芸稽古所(天明 7)	生芝口二葉町→築地鉄砲洲 (藩邸移転に随う)	③92-4
80	8	佐賀 [参勤]	明善堂(文政年間)	溜池藩内→㊦桜田上屋敷 (文政8→明治)	③152
81	8	熊本 [参勤]	校名不明(寛政2年)	不明	③212

ID	巻	旧藩名	江戸邸校名(創立年)	江戸邸校所在地	備考
82	8	延岡 [参勤]	崇徳館(文化12)	虎ノ門邸 参:[文化武鑑]内藤氏(文化期)①(虎門内(藩史大))	③243 ☆一説に明暦2年県藩から延岡藩へ。延享4年の内藤政樹移封後、明治へ。(藩史大)
83	2	長尾 [明治立藩] [?]	日知館(明治)	④(神田橋之外)	①222-223 ☆転封前(明治元)は田中藩と称す。江戸期は田中藩。→ID14の田中藩参照。 ☆江戸邸校は旧田中藩に同じと見る。
84	2	鶴舞 [明治立藩] [?]	克明館(明治)	不明	①229-230 ☆鶴舞藩は慶応4年府中(駿府)藩成立による浜松・井上正直の転封により明治3年に成立。江戸期は浜松藩。→ID11 浜松藩参照。
85	2	松尾 [明治立藩] [?]	拭目館, 曙成堂(不明) ☆ID12 掛川藩参照	不明 ☆ID12 掛川藩参照	①232 ☆明治元年成立の柴山藩藩主。明治3年荒地を開拓, 藩庁を築造。この地を松尾村とし翌年移る。松尾藩成立。江戸期は掛川藩(藩史大)
86	3	朝日山 [明治立藩] [?]	育英館(天保年間) ☆江戸期は山形藩。但し山形藩の報告で江戸邸校の有無不明。この藩を有として採用。	江戸上邸(中下邸ニハ儒員)	①429 ☆明治3年出羽国山形藩[藩主交代盛ん。幕末近くは、弘化2年水野忠精一忠弘]の忠弘の転封により成立。(藩史大)
87		菊間 [明治立藩] [?]	ID13 沼津藩参照	ID13 沼津藩参照	(①234/④55) ☆慶応4年の徳川駿府移封による沼津藩(ID13参照)水野忠敬の移転により成立。市原郡菊間を居所。(藩史大) ☆江戸期は沼津藩。
88		高瀬 [定府] [補遺]	成章館(不明)*	不明*	☆江戸期は熊本新田藩(寛文6年成立)。但しこの藩名は、『史資料』にはない。→慶応4年高瀬藩成立。この藩を有として採用。 *名倉英三郎「江戸府内諸藩邸内学校の概況」p.60の注(1)

【備考】

- ① ID: この表の整理番号。
- ② 巻: 『日本教育史資料』の巻数を示す。
- ③ 旧藩名: 取調府県報告・藩主報告・取調無記による。
- ④ 定府/参勤: 定府大名, 参勤大名であることを示す。
- ⑤ 江戸邸校所在地: 所在地を判断する手掛かりを示す。
④⑤は上・中・下屋敷の略表記。
- ⑥ 備考: 典拠と処理上のコメントなどを示す。
- ⑦ 例えば「①12」は『日本教育史資料』の第一分冊12頁, を示す。
- ⑧ 「要覧」は井上隆明編著『江戸諸藩要覧』昭和57, 東洋書院(藩史大)は藤井貞文・林睦郎監修『藩史大事典』昭和51, 秋田書店
- *印は備考*に対応し, 無印は備考無印に対応する。

(次号へ続く)

注

1. 先行研究に次のものがある。
 名倉英三郎「江戸府内の諸学校と諸藩邸内学校」(東京女子大学付属比較文化研究所『紀要 第45巻』1984, 東京女子大学付属比較文化研究所, pp. 71-80, 所収)
 同「江戸府内諸藩邸内学校の概況」(多賀秋五郎編著『藩学史研究』昭和61年, 巖南堂, pp. 55-61, 所収)
2. 制度の原初形態は、鎌倉時代に遡る。室町幕府も戦国大名も織豊政権もこの種の制度を採用した。徳川幕府での正式の制度化は、寛永12年(1635)6月21日の『武家諸法度』第二条の「大名小名在江戸交替所相定也、毎歳夏四月中可致参勤」による。文久2年(1862)、内外情勢の緊迫化に伴い、大名は3年に1年または100日の在府、その妻・嫡子はともに在府・在国自由となった。(丸山雍成「参勤交代」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第七巻』昭和61, 吉川弘文館, pp. 522-3, 所収)
3. 鈴木暎一「定府」, 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第七巻』昭和61, 吉川弘文館, p. 664, 所収。
4. 名倉英三郎「資料編二『日本教育史資料』藩校別事項索引付調査未済藩一覧郷学事項索引」(『日本教育史資料』の研究)1986, 所収。p. 523以下)によれば、『史資料』で言及されている藩の数は、なお若干増加する。
5. 富山藩(「江戸藩邸内ニ於テ往昔ヨリ下土以上ノ者(略)又ハ子弟ノ者ニテ文武両道ヲ兼修セシム」②259)ならびに岡山藩(前掲表 ID62 の備考参照)は有無曖昧だが、()内の記述により有として処理した。
6. ()内の藩の成立状況については、藤井貞文・林睦郎監修『藩史大辞典』昭和51, 秋田書店, を利用した。
7. 名倉英三郎「江戸府内諸藩邸内学校の概況」p.60の注(1)に、『史資料』第四冊の「目次巻十参照」の「旧蓮池藩」にある「成章館学記」(④379)は高瀬藩江戸邸内学校の学記、とあるのによる。